



本をめぐる輪舞の果てに

1

アイリス・マードック

蛭川久康訳

みすず書房

アイリス・マードック

本をめぐる輪舞の果てに

1

蛭川久康訳

みすず書房

アイリス・マードック

本をめぐる輪舞の果てに 1

蛭川久康訳

1992 年 11 月 14 日 印刷

1992 年 11 月 24 日 発行

発行者 小熊勇次

発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷 3 丁目17-15

電話 3814-0131(営業) 3815-9181(本社) 振替 東京0-195132

本文印刷所 理想社

扉・表紙印刷所 栗田印刷

カバー印刷所 東京美術印刷社

製本所 鈴木製本所

©1992 in Japan by Misuzu Shobo

Printed in Japan

ISBN 4-622-04557-5

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

第一部 夏の盛りに

第二部 冬の最中に

第一部
夏の盛りに

「デイヴィッド・クリモンドが来ているぜ、キルト姿で！」

「ほんとうかい、このパーティに？ どこにいる？」

「ほら、むこうのあのテントさ。ふつうのテントじゃないで、なんていうんだい、大型のテントがあるだろう。リリー・ボインと一緒にんだ」

言い出したのは、ガリヴァー・アッシュ、もう一人の男はコンラッド・ローマス。ガリヴァーは目下失業中で、年齢は三〇代の初めとしか分からぬ、むら氣の多いイギリス青年、一方のコンラッドはそれよりはるかに若いアメリカ人学生で、背が高い部類に入るガリヴァーよりまた一段背が高かった。二人が会うのはこれが初めてだが、コンラッドのことは噂に聞いていたので、ガリヴァーの方からこんな風に話しかけたのだ。驚いたのはなにもコンラッドだけではない、連

れのテイマー・ハーンショーも同じことだった。

今夜は待ちに待ったオックスフォード大学の創立記念ダンスパーティの当夜、時刻は午後一時頃だった。夏の盛りのことで、夜はまだ暗くなく、あたりはそれこそいつになっても闇夜になりそうにない気配だった。会場にはいろいろな音楽がいくつものテントから響き、色とりどりの照明に照らされた大テントの上に灰色がかかった青い夜空が広がって、ガラスの裂片のような黄色い星がすでにいくつか瞬いていた。大きな今にも壊れそうなチーズのような月が、隣接する学寮の境界をなして流れるチャーウエル川（オックスフォードの町を流れるテムズ川の支流）の向うにみえる樹間に低くかかっている。テイマーとコンラッドの二人は着いたばかりで、まだ踊りはじめてもいなかった。ガリヴァーはテイマーをよくというわけではないが、以前から知っていたし、彼女をエスコートするのは誰なのかも聞いていたから、二人を見かけても迷うことなく声をかけたのだ。じつはテイマーの姿を見た時、この大事な夜にこともあろうに自分が彼女の母親のヴァイオレットの相手をつとめるはずだったのを思い出して、ひどくいまましい気分

なつた（さすがに直前になつてなにやら言い訳がましく相手の方から断つてきたが）。ヴァイオレットとペアを組むことを承知したのは、格別好意をもつていたからではなく、ふだん恩義を感じているジェラード・ハーンショーの顔を今回もたてるつもりでおとなしく言うことを聞いただけのことだった。ジェラードはティマーの伯父で、とは言つても、ヴァイオレットの兄ではなく、従兄なのをなんとなく「伯父」ということにしていたにすぎなかつた。ジェラードはガリヴァーよりかなり年長者だった。ジェラードの姉パトリシアは、ジェンキン・ライダーフッドをパートナーにするはずだったが、事情があつて（なんの理由もなさそうにみえたヴァイオレットとは大違いだが）、まだ会場に姿を見せていなかった。長いこと患っている父親の容体が急変したのだった。ガリヴァーはジェラードからヴァイオレットとペアになつてくれないかと頼まれたとき、まさかと当然驚き、それでは年寄りの仲間入りではないかと思つていまましい気持ちだった。ティマーとなら、別段「気がある」わけではないが、嫌な気分はしなかつただろう。それでもガリヴァーに

言わせれば、ティマーは内気でよそよそしすぎた。蒼白い顔色の瘦せた女学生という感じがあつた。ひよろひよろのどことなく頼りない感じもあつて、品にも欠けている。短い真直ぐな髪を片側で分けて、少女っぽく結つていた。純白の服も気に入らなかつた。好みからいえば、少女タイプというより、もう少し線の太い姉御タイプの方がよかつた。まあ、それはともかく、ティマーは今夜のダンスパーティーに従兄のレナード・フェアファックスを通じて知り合つた新しい友人であるこの如才ないアメリカ青年と出席するということだったから、いまさらティマーについてどうこう言つても仕方なかつた。ジェラードはヴァイオレットを申し訳なさそうに押しつけながら、「なに会場でかならず女の子なんか探せるさ」などといい加減なことを言つていたが、いざ来てみると、女の子はみんな相手の男にべつたりで、どうもジェラードの言うようなことにはなりそうになかつた。そのうちアルコールがまわつてくれば、状況が変ることだつてあるだろう。ガリヴァーはさつきから暖かい蒼い夕暮れのなかを誰か知っている人に会わないかと思ひながらぶらついていると

ころだった。そして、その最初が見覚えのあるティマ
ーの顔だった。会って嬉しいというより戸惑いの方が
先だった。それは、今夜、自分が若者が着ているよう
なひだ飾りつきの青いレースの夜会用のシャツを着て
こなかったせいだった。じつはさんざん迷ったあげく、
ジュエラードやジュンキンやダンカンが着てくるだろう
と考えて黒と白のありきたりの礼服にしたからだった。
ガリヴァーは自分でも容姿には自信があつて、事実、
背が高く色の浅黒いすらりとした好青年だった。真直
ぐで油をつけたように濃い色の髪の毛、ある人からわ
し鼻と言われてはじめて気がついたかすかに鉤状にま
がった鼻、人に美しいと言われたこともある澄みきつ
た染み一つない潤いをたたえた金褐色の目。

ガリヴァーは無性に踊りたかった。せつかくのパー
ティを台無しにしてくれたジュエラードにむかつ腹が立
つてきた。しかし、パーティ券（ひじょうに高かつ
た）を買ってくれたのはほかならぬジュエラードだつた
し、だからこそこうしてここにいられるのだと思つて
怒るのをやめた。こんな思いがガリヴァーの心の中で
ぶつかりあい、まざりあっているとき、コンラッド・

ローマスがティマーに小声でちよつと失礼すると言つ
て、デイヴィッド・クリモンドがいると聞いた大型テ
ントの方へ矢のような勢いで走っていった。ずぬけて
長い脚にものをいわせて、芝生の上をあとという間に
駆け抜け、ガリヴァーとティマーをあとに残して、姿
を消した。そのあまりの早さにあつけにとられ、ティ
マーはすぐあとを追うこともできなかった。ガリヴァ
ーには願つてもないチャンスだった。一瞬すぐにでも
ティマーに、踊ろうと言つてみようかと考えたが、断
られてもすれば、それこそ赤恥をかくと思つて、思い
とどまった。それにこれからさき長い間ティマーに
「負い目を感じる」ことになるかもしれない、そんな
ことは真平ごめんだつた。不満を胸におさめて、会場
をのぞき屋気分でひとりぶらぶらするのもしつはけっ
こう楽しかった。それにジュエラードなど昔の連中がま
だシャンパンを飲んでいる部屋に戻つて、ローズ・カ
ートランドに踊りを申し込んでみようという了見もあ
つた。もちろんローズはジュエラードの「縄張り」だ、
だが、ジュエラードは気になんかしらないだろう。この腕
をローズ・カートランドの腰にまわすなんて夢にも考

えたことがなかっただけに、たしかに魅力的な考えだった。もうティマーは眼中になかった。彼女もその場を動かそうとしていた。

ガリヴァーが言った、「今の、コンラッド・ローマスだろ？　いったいどうしたっていうんだい？」

「あの人、イギリスのマルクス主義について論文を書いている最中なんです」とティマーが言った。

「じゃ、奴さん、クリモンドのものは全部読む気なんだな」

「クリモンドを神様みたいに使っているんです。クリモンドのものは全部読んだのに、本人には一度も会っていないんです。誰か紹介してくれる人を知らないかって言われているんですけど、わたしにはできそうになくて。まさかそのクリモンドが今晚ここに来るなんて知らなかったわ」

「ぼくだってですよ」と言ってから、ガリヴァーは「みんなそうですよ」とつけ加えた。

ティマーは中途半端に手を振ると、コンラッドが姿を消したテントの方へ歩き出した。ガリヴァーはさてどうしようかと思ったが、結局みんなのいる所には戻

らないことにした。もう少しあたりを歩いてみたかった。自分の卒業したカレッジでも大学でもなかった。

学位をとったのはロンドン、このオックスフォード流のやり方を冷やかな突き放した目で見ていたが、今夜ばかりは素晴らしいあたりの雰囲気身をまかせてみようという気になっていた。煌々と照らされた古めかしい建物、青白く光るえもいぬ美しい塔、照明に浮き立つ樹木のひととき濃い緑、まるで外国の軍隊を見るような縞模様様のテントの列、その間を色鮮やかな若者たちの群れが回遊している。すこし酒がまわったせいかもしれない、そんな若者の姿を見てもさして妬ましいとも不快とも思わなかった。今は酒を飲むことだ、そう思ってガリヴァーはウイスキーの飲む中庭の方角へ歩いていった。ジュラードと飲むシャンパンはもうたくさんだった。

ティマーはガリヴァーがダンスの申し込みをしようとしてためらったことに気がついていないわけではなかった。断つただろうと思うが、申し込みをされなかったことで傷ついていた。刺繍飾りのあるカシミヤのショールをびったりと体に巻きつけ、胸元で重ね合わ

せ、首のまわりをすっぱり包んでいた。日中は雲もなく、暑く、夕方まで暖かったというのに、今はすこし風がでてきて、寒がり屋のティマーにはひやりとした空気だった。白い夜会服が芝生をこすると、すでに露が下りている気配が感じられた。大テントに着くと、すでに明りがついていて、ポップス・バンドがちょうど一息入れているところだった。踊り手はみんな板張りの床に立ったまま話をしていた。コンラッドの姿はどこにもない。やがて気がつくと、テントの一隅に若者の一団がまるで蜜蜂のようにひしめいて、その人だかりからなにやら盛んにまくしたてているスコットランド訛のある甲高い声がかすかに聞えていた。ティマーはクリモンドに好意をもっていなかったし、怖がっていた。これまで会う機会がないわけではなかったが、それもジェラードやほかの仲間がクリモンドと不和になる前のことだった。今、崇拜者たちの群れへのこの近寄って、コンラッドの仲間に加わる考えはなかった。ティマーはテントのまわりに設けられた腰掛けのひとつにしばらく座ってあたりの様子を眺めていた。するとクリモンドと一緒にいるはずのリリー・ポイン

がひとりぼっちで反対側の腰掛けにいるのに気がついた。リリーはサンダル靴の片方を脱いで、それをじっと眺めたり、臭いをかいだりしている。ティマーは話をしたくなかったので、気がつかないでくれればいいと思った。リリー・ポインはローズ・カートランドとジーン・キャンパスの友達、というか友達らしき間柄だったから、もちろんティマーとは知合いだった。にもかかわらず、リリーの姿にティマーは気持ちが悪く、落ち着かなくなり、少しばかり体が震えた。いや、むしろリリーを無視していた、だから彼女のことなど考えたくなかった。ふたたび大音量の音楽が鳴りだし、ライトの点滅が始まったとき、ティマーはそれにつられるように暗がりの中へ入っていった。太く響く強烈なビートに狼狽しながら、なぜか無性に踊りたい気持ちになっていた。

ティマーはいつ恋におちてもいいと思っていた。計画的に恋におちることだってできるだろう。それとも一見計画的とおもえることも、もしかしたら、目と目が合い、手と手が触れ、ことが用をなさなくなるときの、男と女の間で交わされる、取り違えようもない

愛の仕草のあの胸ときめく瞬間を無上なものとすると、先送りしながら、待ち望んでいるだけのことかもしれない。ティマーがこの夜のパーティをしらずしらずのうちに心待ちにしていたのは、ちょうどそんな心境で、期待にふくらんだ状態だった。そういえば、ティマーがコンラッドに会ったのは、彼がまだケンブリッジ大学に在籍中、近くアメリカに帰国するという時で、ほんの数回、それもたいてい仲間の者と一緒だった。最後に会った時、家まで送ってくれたコンラッドから激しくキスをされた。もともと二人を引き合わせたのはレナードの手紙で、この従兄がアメリカのコーネル大学に美術史研究のため滞在中の時だった。ティマーは長身のアメリカの若者に気のおもむくままに好意を寄せ、つぎに好意以上の感情を抱いた。といっても、そんな素振りは今まで露ほどもみせたことはなかった。コンラッドの夢を見たことはある。ティマーは今二〇歳、オックスフォード大学で歴史を学んで二年目が終わったばかりだった。たしかに彼女は成長した。それでもあの内気と外観からは、他人だけでなく自分もそう思うのだが、どうしても大人とはいえず年齢よ

り幼く単純な女の子にみえた。情事の経験は二度あるが、最初は憧れ次は同情による出来事だったが、その二度のことを痛烈に後悔していた。もともと厳格主義の娘で、まだ本気で恋におちたことは一度もなかった。

ローズ・カートランドはジェラード・ハーンショーと踊っていた。二人のテントでは「甘い懐古調の」ワルツやタンゴやスロー・フォックストロットの音楽が演奏され、それにまじって、スコットランドのエイトサム（八人で踊るスコットランド舞踏のひとつ）とかゲイゴードンズの舞曲（おなじくスコットランド舞踏のひとつ）とかジグ舞曲（十六世紀の英国で流行したダンス）が流れて、それぞれが好みに合わせて踊っていた。先刻のポップス・バンドの演奏が遠くに響いていた。別なテントでは古典ジャズが、さらに別なテントではフォーク・ミュージックが聞えた。踊りの得意なローズとジェラードはそのどれもこなせたけれど、今夜は過ぎし日を懐しむパーティにしたかった。カレッジ付属のオーケストラがシュトラウスを演奏している。ローズはジェラードの黒い礼服の肩に頭を軽く傾けた。ローズは背が高いが、ジェラードはもっと背が高かった。二人は似合いのカップルだった。ジェラードの顔は「凹凸の

はげしい」といえば説明がついたが、美術商をやっている義兄などは「キュービズムの顔」とその特徴をうまく言い当てていた。顔でとくに目立つ部分といえ、その堂々たる骨相、四角ばった釣合いのとれた眉、とがったというよりずんぐりして平板におわっている感じの鼻つきなどいろいろあった。しかし、厳密な数理的構成とも思えるいかつい顔面にもかかわらず、そこに燃え立つ活力のせいで生き生きとした調和をたもち、ユーモアと皮肉をたたえ、笑うとしばしば狂気じみた道化的な苦笑を泛べる面貌をしていた。光沢のある碧い目に、蒿色の巻毛、かつてのように瑞々しい栗色というわけにはいかなかったが、それでもすでに五〇を越えているというのに、まだまだ白髪ひとつなく房々としていた。ローズはブロードで、豊かでくせのない真直ぐな髪。それが時々大きな綿毛のように盛り上がったたりして聖者の戴く天上の宝冠のようにみえた。近頃は鏡を覗きこんで、この生気ある明るいブロードの髪がこのままそっくり明るい白髪に変ってくれるのかしらなどと思った。濃い碧い目とわずかに上向き加減^{ルトルツェ}の目立って美しい鼻、ローズはスタイルのよい体にひ

じょうに濃い緑色のあっさりしたダンス服を着ていた。その人目につく落ち着いた物腰は人から氣に障るとか氣が休まるとか言われるほどだった。微笑をみせていることが多く、今も踊りながら微笑を泛べている。だからといって、胸のうちに積もったさまざまな思いがすべて幸福ばかりとは言えなかった。しかし、ジェラードと踊ることはまるで幸福を絵に描いた仕合せだった。ただし、彼がよく口にする現在の永遠という感覚が彼女自身にも実感できれば言うことないのだが。腰にあてがわれたジェラードの屈強な腕とリードしてくれる微かなそれでいていかにも自信ありげな体の動き、ただそれだけで十分幸福になれるはずだった。だからジェラードが仲間のために用意してくれた今夜の計画を知らされたときから、このパーティを楽しみにしていたのだった。コンラッドとティマーの参加を準備したのもジェラードだった。しかし、望んでいたことが現実になってみると、来なくてもよかったかしら、という気紛れな気分になり出していた。ローズはいつもの微笑をみせると、ふっーと嘆息を洩らした。

「何を考えているか、ちゃんと分かっているんだ」

「そう」

「シンクレアのことだね」

「そうよ」

ローズはシンクレアのことを考えていたわけではないが、ジュラードのことを考えていれば、厭でもシンクレアのことを考えることになったから、嘘をついた後ろめたさはなかった。シンクレアはもう随分昔に死んでしまったけれど、ローズの兄で「スター」だった。さつきカレッジの門をくぐったとき、当然のことのように、ローズは遠く過ぎ去った夏の一日に、ちょうど一年目が終わった大学生の兄を訪ねた時のことを思い、兄のことを考えたのだった。兄は「ほら、あすこに背の高い男の子がいるだろう、あれがジュラード・ハーンショーさ」と教えてくれた。兄よりすこし年下の彼女が、まだ高校在学中の頃だった。その頃のシンクレアからの便りは二年先輩のジュラードのことはかりが書かれていて、ローズは文面から兄がジュラードを愛しているのではないかと想像した。大学を訪れたその日はじめてジュラードも同じように兄を愛しているということが分かった。それはそれでよかつ

た。よくなかったのは彼女自身がたちまちジュラードの虜になってしまったことだった。しかも、長い年月が過ぎた今も望みのないまま飽きもせず、永久に愛しつづけているのだった。兄シンクレアが早死にして二年もたたないうちに、ローズはジュラードと情事を経験したが、そのことは二人とも、まるで二人の間の奇妙な掟でもあるかのように、あとから話し合うことは決してなかったし、思い出として反芻することすらなかった。よくあるように、思い出を新たな空気と変化にさらして、再加工し、装いをあらたにしようとはしなかった。二人は、このことをまるで過去という容器に密閉して、時折いとも優しく触れるだけで、たとえ一人であろうと二人一緒であろうと、決して開いてみようという気を起さない、と考えているようだった。ローズの恋人は他にもいたが、いずれもはかない影のような存在で、求婚をされても、気持ち動かなかった。今、自分の手を握るジュラードの手にすこしずつ力が加わってきたのを感じながら、ローズはこの人は昔、あのことを考えているのかしらと思った。顔を上げもせず、一瞬もたせかけていた頭を相手の肩口から

引き離れた。シンクレアはオックスフォード大学を出たあと、ジェラードと同棲した。ジェラードはジャーナリストとして働き、シンクレアは生物学の研究を続けるかたわら、左翼系雑誌の創刊号を志すジェラードを助けた。シンクレアのグライダーがサセックス州の丘の中腹に衝突するというあの事故の後、ジェラードは、ほんの束の間の白日夢にも似たローズとの時間をはさんで、左翼運動をやめて公務員に転身した。その頃のジェラードはさまざまな男と同棲をくりかえし、その中には大学時代の友人だった、ロンドン在住のダンカン・キャンバスとか、剥製師の息子で遺産を研究中のロビン・トップグラスとかがいた。ロビンは後にフランス系カナダ娘と結婚して、カナダへ行つたし、ダンカンの方はローズの学校友達ジーン・コーヴィッツと結婚して、外交官になった。マークス・フィールドはベネディクト派の修道僧になった。ほかにもジェラードのまわりには、性的関係のないジェンキン・ライダーフッドのような親友がいつも大勢いた。もつとも近頃はジェラードもさすがに独りの生活に落ち着いたようだった。もちろん、ほんとうはどうなの

か、ローズは確かめようもなかった。もう仲間の男性のことで気をもむのをやめにしていた。それより気がかりなのは女友達の方だった。

ワルツはすでに終って、人々は踊り終った直後のほつとした満足と少し疲れた表情で立っていた。ローズは「よかったわ、ティマーにやっとあんな素敵なお男の子が見つかった」と言った。

「しっかり掴まえて放さなければいいんだが」

「あの娘にはそんな積極的なこと言っちゃ駄目だよ。男の方でしっかり掴まえていなきゃいけないわ」

「とにかく優しいし、いちばんいい意味で素朴だし、心根は純だし、男の方でいい女の子だっていうことがちゃんと分かってくれりゃいいんだが」

「じゃあ、飽きられちゃうかもしれないわけ？ て

きばきた娘じゃないしね」

「とんでもない、飽きられるなんて」まるで怒ったようにジェラードが言って、つけ加えた。「可哀相な子だ。いつも父親を探している」

「じゃあ、中年好みってこと？」

「まさか、そんなつまらん意味じゃない」

「そうね、あの娘さんには同情するわ、生い立ちを知っているんですもの。同情されてあたりまえと思うの」

「ほんとうだ、あの泥沼から不思議と汚れひとつ知らないで来たんだからなあ」

「私生児のまた私生児ね」

「そんな言い方は好きじゃないね」

「でも、世間じゃ相変らずそんな風に考えていると思うの」

ティマーの母親ヴァイオレットは正式に結婚したことがない女で、やはり正式に結婚したことのないベンジャミン・ハーンショーの子だった。このベンジャミンはジェラードの父の弟にあたり、ヴァイオレットの母親を捨てた、嘆かわしい男だった。ティマーが生れたのは、ヴァイオレットに墮ろす金がなかったからだ、といわれているが、行きずりの北欧の男との、スウェーデン人だったか、デンマーク人だったか、それともノールウェイ人だったか、ヴァイオレット本人が相手の名前すら忘れてしまったと言っているほどのあまりにもあつけない情事の結果だった。ティマーのなんと

なく頼りない魅力にしても、あの灰色の髪の毛や大きな悲しげな同じく灰色の目にしても、これといってティマーの父親の決め手になる訳ではなかった。ヴァイオレット自身は臆面もなくハーンショーの姓を名乗り、それを娘に引き継がせていた。ヴァイオレットの「自墮落な生活」は、パトリシアだけでなく、ジェラードからもうさん臭い目で見られたが、一向にあらたまる気配もなく、事件らしい事件を起さなかったものの、ティマーの子供時代ずっと続いた。

「ヴァイオレットはすぐくもてたのね」そう言っ、ローズは「今もそうだけど」とつけ加えた。

ジェラードは何も言わないで、時計を見た。今日の彼の服装はいうまでもなくさつきガリヴァー・アッシュが梅んだ黒と白の礼服だったが、それがまたじつによく似合っていた。

ローズは、わたしはまだこの人に近づいてくる女の人に焼餅を焼いている、哀れなあんな小娘のティマーにさえも！と思った。それに時々、あの人にあら人生を捧げてしまった、何かを待っているわけでもないのは承知のうえ、でも、ひたすら待ちつづけて、そ

の間あの人はただ受け取るだけで、ほとんど何も返してくれなかった、と思うことがあった。そんなとき、なんて罰当りなんだろう、あの人がだってかけがえのない愛を与えてくれたのではないか、今だって愛してくれている、たとえ申し分のない妹としてしか考えてくれないとしても、それで十分ではないかしら？

でもやっぱり、今のあの人は公職を退き、これから執筆を始めるとか、心機一転人生をやり直すとか、自己完成を目指すとか何とか、そんなことばかり言っている。でも、ある日突然、なにかとんでもない新しいことを恋をしている女のように始めないとも限らない——そうすれば、わたしのところへ相談を持ちかけてくることだってあるかもしれない！　そこまで考えて、ローズは、ああ、なんて馬鹿馬鹿しい！　やっぱりわたしは幸福じゃないんだわ、と思った。

「お父さんの容体はどう？」ローズが訊いた。

「よくないんだ——でも——いますぐ危ないってわけじゃない——もう駄目だな、時間の問題だ」

「困ったわね。パトリシアの考えじゃ峠を越したんじゃないくて？」

「いや、前より悪いんだ。付添い看護婦を見つかることもできなくてね。代りにパット（パトリシアの愛称）がほんとうによくやってくれている。我慢強いことといったら天使のようだ」

近頃ローズはジェラードの父にほとんど会っていなかった。息子と離れてずっとブリストルの家（ジェラードはそこで生れた）で暮らしていたからだ。それがようやく最近、病気になるってからのことだが、ロンドンの息子の家に引越してきていた。昔、ジェラードの父は息子がローズと結婚することにひどく乗り気でいたから、ローズにすれば、この父親ともまんざら縁がないわけではなく、それだけに会えばたがいに気まずい思いがあった。同じように昔ローズの父は息子のシンクレアがジーン・コーヴィッツと結婚することを望んだ。シンクレアが生きていれば、財産相続権は彼のものだったろうに、現実にはシンクレアのまたいとこ、つまり父親同士が兄弟のヨークシャーのカートランド一家の手に渡ってしまった。この人たちはローズが死ねば、ローズの屋敷も相続するはずだった。わたしたち兄妹には子供がいない、昔の希望に